

# 大学図書館、変わらぬ存在意義を求めて

第 50 回（平成 21 年度）中国四国地区大学図書館協議会研究集会

平成 21 年 10 月 22 日（木）13:10～14:10

武蔵野大学図書館長 小西 和信

## はじめに：本日の話題

- 今回のタイトルの由来と矛盾
- 「大学図書館不要論」の慧眼とそれに応えるために
- 大学図書館経営論私論
  - ミッション、経営戦略、評価
  - 組織の問題～業務委託の進行はどうか
  - 図書館職員の問題～職員はどうあるべきか
  - 大学図書館政策・学術情報流通政策
- 私たちは何に学ぶか

## 大学図書館不要論

- 土屋俊千葉大学教授（NII 客員教授）
  - ・「誰も来ない図書館」『丸善ライブラリーニュース』復刊 4 号（2008. 11）；「大学図書館の将来像」『平成 19 年度大学図書館職員長期研修』プレゼン資料（2007. 7）などで所論を展開
- 大学図書館不要論（\*まとめは筆者）
  - ・研究資料は、オンラインで研究者自身が入手するのが当たり前、図書館の援助はいらない
  - ・レファレンスは、ネット上に「サブジェクト・ポータル」があればいい。もともと研究者自身がサブジェクトライブラリアンだ
  - ・本の置き場所は、専門の自動書庫で保管すればいい。搬送システムが整備されればどこだっていい。分類排架など有害なだけ。
  - ・学生の学習場所は、他に快適な場所があれば図書館である必要はない。
  - ・電子ジャーナル等の契約は、大学の会計部門でできる。  
→しかし、デジタル化が一気に進むわけではないので当面は存続する

## 大学図書館不要論の克服

- 教育図書館機能の充実（学生が中心！）
- 情報リテラシー教育への貢献
- 快適な空間（学習、談話、集い・・・）の提供
- 機関リポジトリ（知財管理の主体）
- データベース形成と電子化の推進
- 地域社会での役割
- （当り前のことが当たり前ができる図書館）  
⇒ 学内の学術情報基盤の構築

## 大学図書館経営論を考える

- **Urquhart, D.** ; 高山正也訳『図書館業務の基本原則』(勁草書房, 1985) との出会い→「行動の指針」としての 17 か条
- **エビデンスに基づく図書館経営**→「意思決定を科学的根拠 (Evidence=エビデンス) に基づいて行なうべきだとする考え方」(依田紀久「根拠に基づいた図書館業務の設計」『カレントアウェアネス』No. 291, 2007. 3)
  - ・「知識を持たず、あるいは十分な知識を持たずに、実行に移す」→「客観的な事実 (根拠) に基づいた経営判断, エビデンスに基づく経営 (Evidence-Based Management)」
  - ・必要なエビデンスの絶対的不足→図書館員自らがエビデンスを生み出し蓄積する+図書館情報学研究者による研究 (永田治樹「図書館経営とエビデンス: 実務と研究をつなぐ」『情報の科学と技術』2008)
- **東京大学附属図書館の岸本 (英夫館長) 改革 (1960 年代)**
  - ・「附属図書館の近代化」→①全学総合目録の作成, ②中央図書館, 部局図書館の調整連絡機能の設置, ③指定書制度の増強, ④中央図書館の改装 (「瀕死の無気力な状態」)
- **新しい図書館経営論の試み**
  - ・柳与志夫『知識の経営と図書館: 図書館の現場; 8』(勁草書房, 2009. 2)
  - ・これまでの図書館経営論を総括し、「知識の経営」を提案

## ミッション、経営戦略、図書館評価

- **ミッション・ステートメントの重要性**
  - ・「組織の基本的目的であり、達成すべきこと」(Kotler)
  - ・**使命**→「組織がそうあらねばならない存在理由・存在意義」
  - ・**目的・ビジョン**→「組織がそうありたいと願う姿」
  - ・**目標・ゴール**→「目的を個別具体的に表現したもの」
  - ・**ミッションステートメント**→「使命・ミッションを組織内外に公開すること」(上田直人『大学図書館の使命とミッションステートメント: 筑波大学修士論文』2008. 3)
- ・大学図書館とミッションステートメント (上田 2007 調査)

種別	対象	回答大学	MSのある大学
国立大	87	69 (79.3)	28 (40.6)
公立大	75	45 (60.0)	3 (6.7)
私立大	541	245 (45.3)	28 (11.4)
放送大	1	1 (100.0)	0 (0.0)
計	704	360 (51.1)	59 (16.4)

- ・勤務大学図書館「大学の知のシンボルとして、人材育成に貢献する」2006 年制定 (図書館の存在根拠を明らかにする)
- ・大学の理念「仏教精神を根幹とした人格育成」
- ・大学の基本目標「武蔵野大学は、無数の縁からなる自己と社会に目覚め (Awakening)、共創できる実践力を鍛え (Link)、次代を切り拓く (Growth)」

\*NLL の創始者

\*ほかに Kotler の非営利組織へのマーケティング概念の拡張にも驚く (フィリップ・コトラー著; 井関利明監訳『非営利組織のマーケティング戦略』第一法規, 1991)

\*海外の調査結果

CLIP Note①(1985) 74/132 56.1%  
 Brophy(1991) 72/89 80.9%  
 Bangert(1997) 58/104 55.8%  
 CLIP Note②(1999) 136/161 84.5%

■ 経営戦略～規模の大小を問わず下記を含むもの

- ・館内外の経営環境の分析
- ・経営理念に基づく当面の経営方針
- ・優先すべき顧客とサービスの選択
- ・それに必要な経営資源の配分
- ・事業計画の骨子等（柳 2009）

■ 勤務図書館での経営戦略

- ・「当たり前前」のことが「当たり前」にできる図書館を目指す。
- ・具体的には→卒業生への図書貸出、蔵書の充実（選書体制を含む）、ILL 料金の研究費相殺、学生の書庫入庫、ミニ展示活動の充実、広報の充実（Web ページの改善）、館内快適性の向上、地域公立図書館との連携強化など
- ・当面の目標→入館者数・貸出冊数の増加

■ 図書館評価

- ・1991 大学設置基準の大綱化→自己点検・評価
- ・外部評価
- ・図書館サービス品質測定ツール（LibQUAL+®）→慶応義塾大学（市古みどり・酒井由紀子）、東北大学附属図書館（松井好二ほか）
- ・運営・サービスのモニタリング→「進捗管理の観点から年間を通じて恒常的に業務・サービスの運営状況を把握し、それに即応した改善を行うための図書館経営上不可欠の作業、（中略）日本の図書館界ではまだその重要性が認識されていない」（柳 2009）

⇒ 利用者とのギャップをどう埋めるか

組織の問題～業務委託の進行はどうなるか？

■ 「アウトソーシング」と「その他の業務の外部化」との違い

- (1) 「業務の設計・企画」を組織内部で行なう。「業務の運営」（業務の指揮と実行）も内部で行なう。→「人材派遣」
- (2) 「業務の設計・企画」を組織内部で行なう。「業務の運営」（業務の指揮と実行）は外部で行なう→「外注・代行」
- (3) 「業務の設計・企画」を組織外部で行なう。「業務の運営」（業務の指揮と実行）は内部で行なう。→「コンサルティング」
- (4) 「業務の設計・企画」を組織外部で行なう。「業務の運営」（業務の指揮と実行）も外部で行なう。→「アウトソーシング」（花田光代、アウトソーシング協議会のウェブページから編集）

「重なり組織」と「隙間組織」

■ アウトソーシングとは？

- (1) はっきりとした戦略性を有するもの
- (2) 業務の設計・企画と運営の双方が外部化されているもの（佐藤翔『大学図書館のアウトソーシング』筑波大学卒業研究, 2008. 1）

問題は全面的な管理委託

■ 全面的な管理委託の進行

- ・6年ほど前から全面的管理委託（アウトソーシングの主体が大学）が始まった

- ・関東圏私大を中心に深く静かに進行中（コスト削減効果は絶大→経営的には大きな魅力）→今年度の私立大学図書館協議会東地区館長会議（獨協大学、6月）でのショック

- ・中小大学から大規模大学へ

- ・間違ったアウトソーシング→「コアコンピタンス」の委託？

■ アウトソーシングの評価はこれから→冷静な分析が必要

- ・メリット→①専門性の確保（趣旨どおりであれば）、②人事の流動性の確保（人事制度／雇用調整）

- ・デメリット→①経験・知識を有する人材／ノウハウの流出、②独自性の喪失、③主導権の業者への移行（佐藤翔氏）

■ 予想される深刻な問題、懸念

- ・人が育たない
- ・図書館のNEXTを考えられない
- ・教員利用者の気持ちの離反
- ・目が外部に向かない
- ・すべてが経営的側面からスタートとしたことによる歪み
- ・未来の希望を持ってない労働条件（ワーキングプアの発生）
- ・組織への帰属意識をどう評価するか？
- ・結果的にサービスの品質を高めることは可能なのか？等

■ 「指定管理者制度」の導入をめぐって

■ 指定管理者制度

- ・大学図書館関係者にはなじみの薄い指定管理者制度だが・・・
- ・2003年地方自治法の一部改正によって、民間事業者を含めた法人その他の団体に公共施設等の管理運営を委託できるようになった
- ・公共図書館等への導入状況は年々増加（219館/3043館中）

■ N市図書館協議会の提言（2008.3）

- ① 管理業務を委託することに対する懸念→「成長する組織（なにしる「図書館は成長する有機体」）の駆動力を失う」
- ② 営利組織による経営の問題点→業務継続性への不安
- ③ 蔵書構築における問題点→短期間で交代する受託者に長期的計画が可能か
- ④ 市民の個人情報保護への不安→受託者には罰則のある守秘義務無
- ⑤ 市民の声を反映できなくなる不安→直接的な住民監査請求や情報公開の対象外
- ⑥ 図書館協力・連携体制を形成する点での問題点

■ この流れをどう止めるか

- 制度自体の改廃
- 図書館員による説明、実績づくり→世論の誘導
- 不幸にして「丸投げ」になってしまったら

■ これからどうなるか？

- 変化の兆し
- ・指定管理者制度から直営に復帰（安来市立）
- ・委託から全員正職員へ（経産省独立行政法人）

\* 進行する理由→私学助成

\* N市立図書館の概要

- ・人口 189 千人，職員 70 (正規 33)，蔵書 722 千冊，受入冊数 47,340 冊，貸出冊数 2,169 千冊，予約 502.9 千件，資料費（2005 決算）84,845 千円

\* 2008 年の図書館改正の国会

論議「なじまない」

\* 衆参両院文教委員会での決議→弊害あり、専門職員を核に（松岡要「公立図書館の指定管理者制度の検討状況」『出版ニュース』2009年8月下旬

## 図書館職員の問題～職員はどうあるべきか

### ■ 図書館員になる（である）ための極私的 10 原則

① ねばり強いこと、② サービスへの思い入れ、③ 理想の図書館像を持つ、④ 歴史に学ぶ、⑤ プロ意識を持つ、⑥ 先ず図書館の利用者になる、⑦ 規則を振り回さない、⑧ 成功体験に振り回されない＝変革への志、⑨ 文章力とプレゼン能力を鍛える、⑩ 得意なことを持つ＝「なりたい気持ち」を忘れない ⇒誰でも図書館員になれることを示したい

### ■ プロフェッショナルとしての自覚

- ・最初に自覚ありき
- ・関連分野（経営学、会計法規など）にも関心を持つ
- ・理想の図書館像を持つ→すべてを任されたらどうする？
- ・視点を高く持つ→自分の奉仕対象を見定める

### ■ サービスへの姿勢

- ・前川恒雄氏の言葉→「われわれは自分が何かするのではなく、何かする人々にサービスする人間なんだということを腹の底から自覚すること」
- ・利用者の喜びが自分の喜び→利用者を手ぶらで帰さない（顧客満足度！）
- ・新しいサービスの創出→アーカート「供給は需要を創る」
- ・サービス概念は変遷する→「もっともわがままな利用者の要望を満たす」という命題
- ・図書館の利用者になる→ユーザとしての目線

### ■ 文章力・論理力とプレゼン能力

- ・仕事＝「他人に説明し説得すること」→文章力とプレゼン力
- ・初めての概算要求の屈辱（その後学んだノウハウ）→①「真実」がなければ人を動かすことはできない、②ストーリーを作り、自分がその気になる、③組織の方向性、時代の風向きを読む、④わかりやすさと説得力（ハワイ天文台「すばる」誕生秘話：「置くことを禁ずる法律はない」）
- ・図書館の歴史・先例に学ぶ→①パトナム館長の言葉、②戦後の図書館発展を担ってきた図書館人の業績に学ぶ
- ・理論を学ぶ→公共図書館の論点など

### ■ 規則に振り回されない・振り回さない

- ・「規則通りの人」の問題点→誌名変遷とみなすかどうか
- ・故松本清松戸市長の言葉→「法は人のためにある、人のためならまげても良い」
- ・規則は作られたルーツまで遡って考える
- ・大事な柔軟性、寛容

### ■ 補足～採用と研修

- ・採用→「折り鶴」と「鉛筆削り」の採用試験（溝上憲文『日本一の村』を超優良会社に変えた男』（講談社、2007.8）
- ・ひとはどうやって育つか？→①仕事への取り組み（仕事を盗まない人間は伸びない）、②他所を見る（海外研修など）
- ・今は DRF（ダーフ）が道場

### ■ いま求められる図書館員

- ・ドメインの広い人
- ・学ぶ姿勢のある人
- ・実践する人→「やらない理由」を探さない
- ・どこにでも説明に出かけることのできる人
- ・危機意識のある人

### ■ 最強の原則

★ 24 時間図書館のことを考える

★ 図書館への情熱（好きになること）

## 大学図書館行政・学術情報流通政策

### ■ わが国の大学図書館行政・学術情報流通政策の歴史

- ・ 1965年 情報図書館課の設置（始まり）
- ・ 1966 大学図書館実態調査の開始
- ・ 1971 国立大学附属図書館へのコンピュータ導入経費の計上
- ・ 1972 レファレンス業務担当職員定員の配分
- ・ 1975 学生用図書購入費の計上
- ・ 1977 外国雑誌センター館，外国図書コレクション購入費
- ・ 1979 大学図書館間の文献複写料金一括精算システム開始
- ・ 1980 学術情報システム構想発表
- ・ 1984 NACSIS-CAT 開始
- ・ 1987 学術情報センター発足，学術情報ネットワーク開始
- ・ 1990 NACSIS-ILL 開始
- ・ 1997 先導的電子図書館プロジェクト
- ・ 2004 ILL 料金一括精算制度（国公私）
- ・ 2005 NII 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業

### ■ 政策とは何か？

- ・ われわれの抱える課題や難問を解くための国の方針，計画（そう信じたい）→一機関や地域の協力では解決できないような全国的な課題や難問に適切な解決策を提供するものであるはず→だから重要！

### ■ 大学図書館行政・学術情報流通政策の関与者及び組織

- (1) **政策立案者グループ**→文部科学省の担当官等，科学技術・学術審議会及びその分科会・部会等
- (2) **政策実行者グループ**→文部科学省の担当官等，大学・大学共同利用機関等，研究者団体（学協会等）
- (3) **政策形成に影響を与える者のグループ**→大学・大学共同利用機関等，国公私の大学図書館協議会，研究者団体（学協会等），その他（議員，総合科学技術会議，日本学術会議，他省庁等）

### ■ 政策は誰が作っているか？

### ■ 審議会（学術審議会，科学技術・学術審議会）の影響力

- ・ 1967 学術奨励審議会を改組して学術審議会を設置

### ■ 政策研究の重要性

- ・ 成功した政策はもちろん，失敗に終わった政策についても，それらの政策形成過程を研究することが今求められている
- ・ 政策形成過程の研究によって，有効な政策の作り方，そのような政策形成への大学図書館現場からの影響の与え方が学べるはず

### ■ 政策研究の手法

- ・ 金容媛『図書館情報政策』（丸善，2003）などの情報政策の理論的研究
- ・ 土屋科研・研究成果報告書『電子情報環境下における大学図書館機能の再検討』2007.3 で進めている関係者（松村多美子氏，雨森弘行氏，田中久文氏ら）への聞き書きは重要！

## **私たちは何に学ぶか①：旭山動物園に学ぶ**

### ■ 使命（ミッション）への揺るぎない確信

- ・良い動物園を提供したい
- ・市民を楽しませたい、喜ばせたい

### ■ アイデア・工夫を生み出す～「やれることは何でもやる」

- ・飼育員によるガイド→飼育員だけが知っている動物の生態
- ・分かりやすい手書きのポップ作成
- ・夜の動物園
- ・行動展示→動物のありのままの姿、本来の姿を見せつける

### ■ 将来計画の立案

- ・将来構想を図にする→「絵に描いた餅」→予算要求に活かす
- ・何を目指して進むのか、職員全員が理解できる

### ■ 取り組み体制の整備

- ・職員間の葛藤から相互信頼へ
- ・徹底した話し合いの文化

### ■ 予算獲得のノウハウ

- ・市民の応援をバックとして
- ・将来構想図の存在
- ・お金が無くてもできることから始めて実績を示す

### ■ 市民を味方に付ける

- ・どうやったら得られるのか？
- ・日頃からの職員の頑張りがなくては話にならない。  
(小菅正夫『<旭山動物園>革命一夢を実現した復活プロジェクト』角川書店、2006.2)

## **書店に学ぶ**

### ■ 状況逆転？

- ・少し前までは、書店人が「図書館に学ぼう」と言っていた

### ■ 厳しさのレベルが違う

- ・書店の抱える難問→①メガ・ブックセンター（1,000坪以上など）の攻勢、②万引きの横行（総売上の2%?）、③新古書店の発展、④ネット書店との戦い、⑤返本問題（再販制度の見直しも）など

### ■ 書店員が本を知っている：池袋ジュンク堂のレジカウンター統合→自動貸出機の導入でカウンターの地位低下懸念

- （『本を売る現場でなにが起こっているのか!?!』雷鳴社、2007.9）

### ■ 山の本屋さん（和歌山県日高川町イハラ・ハートショップ）

- ・巡回販売「見本箱」、「図書館でボロボロになっている絵本」、エスキース展、原画展、サイン会、トークイベントなど
- ・「こんな田舎だから、予算がないから」と言わない  
(井原万見子『すごい本屋!』朝日新聞出版、2008.12)

### ■ 生き抜くための3つの力→①基本力→在庫調査、発注、親切な接客、売場整理など基本的な仕事の徹底的体得が時間を

- 作り出す、②売上力→お客様の心をつかみ、売上を伸ばし、利益を増やすノウハウ、③経営力→「読者本位の経営」

- 生き抜くための8つのヒント→① 仕事に喜びを見つけよう(創意工夫すること, 読者に提案すること, 勝負をかけること[いま苦境に立たされているのなら, 闘うことで, 一気に攻勢に転じ, 局面を打開しなければならない]), ② 本を読んで仕事に活かそう, ③ お客様の喜びと苦しみを伝えよう, ④ 自己訓練をしよう, ⑤ 出版業界に友だちを作ろう, ⑥ 書店の仕事に終わりはないが, どこまでも行ってみよう, ⑦ ベストイメージを作ろう, ⑧ 書店人として悔いなく生きよう。(青田恵一『たたかう書店』八潮出版社発売, 2005.9)

#### ■ ポップの威力

- ・外山滋比古『思考の整理学』(ちくま文庫) 100万部→2006年秋盛岡市のさわや書店「もっと若い時に読んでいけば・・・」(「23年でミリオン達成」『朝日新聞』2009.9.6)
- ・大崎梢「ときめきのポップスター」『平台がおまちかね』(東京創元社, 2008.6)
- ・梅原潤一『書店ホップ術:グッドセラーはこうして生まれる』(試論社, 2006.5)

#### ■ タイムリーな企画

- ・オバマ本コーナー(平和賞受賞の翌日)

#### **おわりに**

#### ■ ハードな時こそチャンス

- ・「めぐられないことはマイナスではない」
- ・お金がなくても、ひとが少なくても出来ることはある

#### ■ 「ひと、人材」に尽きる

- ・「ひと」を大事にしない社会や組織は発展できない!
- ・「ひと」さえいれば未来を拓ことができる

#### ■ 「不要論」克服しよう! 利用者のために

**ご静聴ありがとうございました!**



「大学図書館、変わらぬ存在意義を求めて」関連・参考文献リスト（話題の順に）

- 1) 土屋俊「誰も来ない図書館」、『丸善ライブラリーニュース』, 復刊 4 号, 2008. 11
- 2) 土屋俊「大学図書館の将来」、『平成 19 年度大学図書館職員長期研修講義要綱?』, 筑波大学附属図書館, 2007. 07 <<http://cogsci.l.chiba-u.ac.jp/~tutiya/Talks/071001tyooken0.pdf>>  
[確認: 2009.10.17] \* 第 1 章に「大学図書館不要論」。「長研」の方は「学術コミュニケーションの動向」なので、これは違う場所での講演ではないだろうか?
- 3) 石松久幸(カリフォルニア大学バークリー校東アジア研究図書館)「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」、『出版ニュース』, 2009 年 9 月下旬号, pp. 6-10. \* アメリカの大学図書館で何が起きているか? 「図書館は残る、巨大な倉庫として。倉庫の管理人は残る、だがライブラリアンはいなくなる。」
- 4) 「世界が減びる日の前日に林檎の樹を植える」のは誰? 、『ミニマルキッチン Blog』  
<<http://blog.minimalkitchen.com/?eid=20724>> [確認: 2009. 10. 17] \* 開高健、ゲオルギウ、ルッター、キング牧師・・・いったい誰の言葉か? 「レファレンス協同データベース」にも回答あり。
- 5) Urquhart, D. 著; 高山正也訳『図書館業務の基本原則』, 勁草書房, 1985. \* 原著は 1981 年刊。ランガナタンの『図書館学の五法則』(1931) から 50 年後というのも興味深い。(抄) 1. 図書館は利用者のためのものである。3. 供給は需要を創る。6. 図書館はそのサービスの代償を受けるべきである。7. 図書館は、一館でもグループとしても、費用対効果について関心を払わなければならない。8. 情報は原則として貨幣額では価値付けできないものである。9. 図書館は収獲通減の法則に関心を払わなければならない。10. 完全を求めて時機を失してはならない。11. 図書館の活動コストは活動の規模が大きくなるにつれて低減すべきである。12. どんな図書館も孤島ではない。13. 図書館の経営計画は利用者の要求について客観的なデータに基づくべきである。14. 新技術や新システムを利用するに際し、過去を振り返るのではなく、将来を見つめることが必要である。15. 図書館の職員はチームの一員として働くべきである。16. 図書館員という職は学者のための閑職ではない。一図書館員の仕事は、しばしば、多くの学者の研究を促進し、助けるものである。17. 図書館は社会にとって価値あるものであり得る。18. 図書館(学)は経験科学である。
- 6) 依田紀久「根拠に基づいた図書館業務の設計」、『カレントアウェアネス』. No. 291, 2007. 3.
- 7) 永田治樹「図書館経営とエビデンス: 実務と研究をつなぐ」、『図書館雑誌』. 102(2), 2008. 2, pp. 84-87. \* 著者はいつも日本の大学図書館界の誰よりも先に、大学図書館のこれから進むべき道を照らして見せてくれたように思う。
- 8) 東京大学附属図書館編訳『大学図書館の近代化をめざして: 東京大学附属図書館改善記念論集; [第 1 集], 第 2 集』, 東京大学附属図書館, 1963. 11-1964. 5. \* 著名な宗教学者である岸本英夫博士は、当時の茅誠司総長の懇請を受けて館長に就任。余命何年と宣告されたガンとの壮絶な闘いを記録した『死を見つめる心: ガンと闘った十年間』(講談社, 1964.8) も名著。「大学の中では図書館が瀕死の無気力な状態で置き去りにされている。図書館を置き忘れているということが、日本の大学教育の大きな盲点になっている」、「東大図書館改善の目的がきわめて単純な、誰にでもわかりやすい、

納得のいくような考え方にもとづいて行われたということでもあります。それは、近代大学図書館というものは、もはや、図書をしまっておく場所ではない、図書をひろく、効果的に、読ませる、利用させるような働きをする、その働きこそ近代大学図書館の役割である、ということでもあります」

- 9) 金子豊編『大学図書館の近代化をめざして・その行方：元東京大学附属図書館長岸本英夫 図書館関係論集・記録ノート；私家版』，千葉：金子豊，2007.7. \*編者は、元武庫川女子大学図書館長、琉球大学附属図書事務館部長、愛媛大学附属図書館課長など歴任。
- 10) 柳与志夫『知識の経営と図書館：図書館の現場；8』，勁草書房，2009.2. \*現国立国会図書館電子企画課長。前千代田区立図書館長。千代田区立での経験が随所に生かされている。
- 11) 田井郁久雄『図書館の基本を求めて；[I]，II』，岡山：大学教育出版，2008. \*現広島女学院大司書課程。元岡山市立図書館勤務。『風』『三角点』などの個人雑誌等に発表した図書館論説をまとめたもの。著者の長年の現場経験に培われた揺るぎない、確かな図書館観に共鳴を覚える。公立図書館の問題を考える人には必読文献だが、大学図書館にも通じるもの大。図書館経営論の名著に推薦。
- 12) 上田直人『大学図書館の使命とミッションステートメント：筑波大学図書館情報メディア研究科修士論文』，筑波大学図書館情報メディア研究科，2008.3 <[http://www.hosei.ac.jp/general/lib/shuron/ueda\\_shuron.pdf](http://www.hosei.ac.jp/general/lib/shuron/ueda_shuron.pdf)> [確認：2009.10.18]：上田直人「ミッションステートメントと図書館の使命」，『専門図書館』，(235)，pp.1-10，2009.
- 13) 佐藤義則「LibQUAL+TMの展開と図書館サービスの品質評価」，『カレントアウェアネス』，280，pp.9-12，2004.6 \*思えば「ライブカル」はこのあたりからトレンドに。
- 14) 市古みどり「LibQUAL+の実施に向けて」，『薬学図書館』，53(3)，pp.266-270，2008  
\*今年の私立大学図書館協議会東地区部会（獨協大），同協議会総会（佛教大）での講演発表も。
- 15) 花田光世「戦略アウトソーシングモデル」\*慶應義塾大学花田光世教授が提案したいわゆる「花田モデル」。配布プリントの訂正：「光代」（誤）→「光世」（正）、「アウトソーシング協議会」（誤）→「日本アウトソーシング協会」（正）
- 16) 島田達巳「経営におけるアウトソーシング」，『情報の科学と技術』，57(7)，pp.325-330，2007.7. \*アウトソーシングとは本来「戦略的」観点で行うものだ。
- 17) 佐藤翔『大学図書館のアウトソーシング：卒業論文』，[筑波大学]逸村裕研究室・佐藤翔，2008.3；佐藤翔，逸村裕「大学図書館における外部委託状況の量的調査」，『Library and Information Science』，No.60，2008，pp.1-27.
- 18) 保科恵美子「大学図書館業務のアウトソーシング：アウトソーシングの現状と問題点，アウトソーシングを成功させるには」，『平成18年度大学図書館職員講習会』，2006.10 <<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/librarian/h18/lib3.pdf>> [確認：2009.10.19]
- 19) 大島真理『司書はなにゆえ魔女になる』，郵研社，2009.6. \*おなじみの「司書は魔女」シリーズの3作目。長年の国立大学図書館職員としての経験に裏付けられた発言に納得できる。「言ってみれば図書館は昔から“格差社会”であるのだ。しかし昔は、非常勤であれ職務内容は常勤と変わらなかつたから、それが救いでもあり、誇りでもあって司書を続けてきたとも言える。現在、アルバイトも限定された雇用期間となり、転々と渡り歩く他はない。」

- 20) 西東京市図書館協議会『図書館事業の見直し(提言)』, 西東京市図書館, 2008. 3 <[http://www.library.city.nishitokyo.lg.jp/a\\_sonota/kyougikaiteigen2008/2008kyougikaiteigen.pdf](http://www.library.city.nishitokyo.lg.jp/a_sonota/kyougikaiteigen2008/2008kyougikaiteigen.pdf)> [確認: 2009. 10. 19]
- 21) 松岡要「公立図書館の指定管理者制度の検討状況」, 『出版ニュース』, 2009 年 8 月下旬号  
\* 「流れ」は止まったかに見えるが・・・
- 22) 前川恒雄『図書館員を志す人へ: 前川恒雄講演録』, 長崎: 純心女子短大図書館学研究室, 1985. 5. \* 4 版(1988)の復刻版が図書館づくりと子どもの本研究所(長崎)から 2007 年に刊行されている。図書館員としての初心を思い起こさせてくれた感動の講演記録。
- 23) 小西和信「図書館員に求められる資質」, 『多様な図書館: 新集知の銀河系; 2』, 日本図書館協会, 2004. 8. \* 2001 年に図書館情報大学(当時)の 3 年生に「情報と職業」(特別講義)の 1 コマとして話した内容を講義録としてまとめたもの。大学生に話をするのはその時が初めての経験だった。この私的 10 か条は、前川恒雄氏とアーカートの影響を強く受けている。
- 24) 藤野幸雄『図書館へのこだわり』, 勉誠出版, 2001. 7. \* 「図書館に勤め、図書館学を教えて、五十年近く経つ」著者の自伝的な図書館論。「図書館の現場で通用するのは、図書館分類や情報検索の知識ではなく、他人の発言を理解し、自分なりにまとめる能力が第一であって、日本語を読む能力をもっと付けさせねば、今後の就職戦争にも大学は勝ち残れない」
- 25) 小平桂一『宇宙の果てまで』, 文藝春秋, 1999. 3. \* ハワイのマウナケア山頂に巨大天文台を作った小平国立天文台長によるスバル誕生秘話。外国の土地に数百億円もの施設を作ることに誰もが不可能と考えていたとき、友人の大蔵省局長の助言「でも、置くことを禁じた法律はありません」。概算要求って、規模の大小はあってもこういうことだなあとしみじみ納得した。
- 26) 樹林ゆう子『すぐやる課を作った男: マツモトキヨシ伝』, 小学館, 1996. \* 市民の利益を真っ先に考えた松戸市長の奮闘記。「市役所とは市民の役に立つ人のいる所だ」→「法は人のためにある、人のためなら曲げても良い」。
- 27) 溝上憲文『『日本一』の村を超優良会社に変えた男』, 講談社, 2007. 8. \* 岩手県の人口日本一の村の役場の大改革を行った柳村純一村長。「リーダーシップを持って、周囲と協力、協調しながら率先して行動できる人」をどうやって選ぶか? → 6 人 1 チームにして「鉛筆削り」と「織り鶴」を課題とする。
- 28) 小菅正夫『<旭山動物園>革命: 夢を実現した復活プロジェクト』, 角川書店, 2006. 2.  
\* 一度廃園まで追い込まれ、奇跡の復活で“日本一”にまでなった動物園。どんな方法で実現したのか? NHK プロジェクト X でも採りあげられた。『DVD 旭山動物園: ペンギン翔ぶ: 閉園からの復活』(NHK エンタープライズ, c2006)。
- 29) 渡辺満『なぜ人はジュンク堂書店に集まるのか: 変わった本屋の元大番頭かく語りき』, 自由国民社, 2002. 7. \* 「私が唯一自慢できるのは従業員です」。「できるだけ変わった人材を集めるように」→「何でもいいから一つのことをずっと続けていて、集中力があり、物事をよく考え、こだわりをもち、変人とまでは言わないが、ちょっときわどいぐらいの学生がいたら、早めに会わせてほしい」。
- 30) 編集の学校・文章の学校監修『本を売る現場で何が起きているか』, 雷鳴社, 2007. 9. \*

ジュンク堂書店池袋店など。

- 31) 小田光雄『出版社と書店はいかにして消えていくか』, ぱる出版, 1999. 6. \*「再販制(定価販売)」と「委託制(返品制)」による近代流通システムの終焉について。著者には、『書店の近代: 本が輝いていた時代』(平凡社新書, 2003. 5) など関連本多数。
- 32) 井原万見子『すごい本屋!』, 朝日新聞出版, 2008. 12. \*山の本屋さん(イハラ・ハートショップ)の挑戦。「図書館でボロボロになっている絵本を探す」。
- 33) 青田恵一『たたかう書店』, 青田コーポレーション出版部(八潮出版社発売), 2005. 9.  
\*「書店の仕事は、すべてが闘いである。闘いでないものは、なにひとつないといってよい」(まえがき)。生き抜く力→(1)基本力、(2)売上力、(3)経営力「売り場スタッフは、担当ジャンルの「経営者」なのだ。したがって担当者は、売上だけでなく、在庫額、これに掛かる利子、スペースに応じた家賃、人件費などのコストにも高い関心を持ち、それらの数字を、おおよそでも一できれば正確に、つかみたい。さらに、そこから採算点を割り出し、利益とキャッシュを増やす対策を検討してみよう。そのうえで、このような経営の視点から、みずからの仕事を見直したい。売上アップの努力も提案などの企画も、商品の仕入も在庫管理も、ここから洗い直すのである。これは誰でも可能な、経営力を向上させる実践となる」。
- 34) 「23年でミリオン達成」, 『朝日新聞』, 2009. 9. 6. \*書店ポップの威力。
- 35) 大崎梢「ときめきのポップスター」, 『平台がおまちかね』, 東京創元社, 2008. 6 \*書店員だったらしいこの著者には、本屋さんを舞台にした「成風堂書店事件メモシリーズ」がある。『配達赤ずきん: 成風堂書店事件メモ』(東京創元社, 2006. 5); 『晩夏に捧ぐ: 成風堂書店事件メモ・出張編』(東京創元社, 2006. 9); 『サイン会はいかが?: 成風堂書店事件メモ』(東京創元社, 2007. 4)。また、書店の出てくる読み物には、碧野圭『ブックストア・ウォーズ』(新潮社, 2007. 10); 田口久美子『書店繁盛記』(ポプラ社, 2006. 9); 田口久美子『書店風雲録』(ちくま文庫, 2007. 1) などあり。
- 36) 梅原潤一『書店ポップ術: グッドセラーはこうして生まれる』, 試論社, 2006. 5. \*書店ポップの技術書も沢山出されているが、本書は神奈川県有隣堂書店に勤務する著者の事例ポップ紹介。

付録: 高知が舞台の小説(最近目を通した範囲で。お遊びです)

- 37) 有川浩『空の中』, メディアワークス, 2004. 11. \*主人公の瞬少年は仁淀川沿いの伊野町に。文庫版には、河漁師の宮じいと瞬と佳江のその後を描いた『仁淀の神様』収録。
- 38) 大崎梢『夏のくじら』, 文藝春秋, 2008. 8. \*よさこい祭り。高知大1回生の篤の青春。
- 39) 西澤保彦『スナッチ』, 光文社, 2008. 10. \*フィニの『盗まれた街』に刺激されて書いたとのこと。高知市内があちこち紹介されている。著者は県立安芸高校出身、元高知大助手。
- 40) 西澤保彦『完全無欠の名探偵』, 講談社, 1995. 6. \*高知大出身で地元の短大に勤めることになった「りん」のお目付け役で派遣された山吹みはるは名探偵・・・舞台は高知。
- 41) 西澤保彦『収穫祭』, 幻冬舎, 2007. 7. \*1982年8月17日の台風の日四国の山村首尾木(しおき)村[架空]で大惨劇が起こる。隣の豊仁(ゆたひと)市も架空だが、モデルは高知市か?
- 42) 坂東真砂子『死国』, マガジンハウス, 1993. \*佐川町生まれ、土佐高校出身。舞台は高知。